

「誰もが共に生き生きと学ぶ学校」を目指して

群馬県総合教育センター 特別支援研究係
指導主事 村上 亮 周藤 敦志 澤田 佳祐

《調査研究の概要》

国は、共生社会の実現を、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題であるとしている。群馬県も群馬県教育ビジョンにおいて、共生社会の実現に関わる目指す学習者像、育成すべき資質・能力、政策を示し、共生社会の実現につながる教育を推進している。特別支援研究係では、共生社会像を「誰もが共に生き生きと暮らす社会」、その中の学校像を「誰もが共に生き生きと学ぶ学校」と捉え、そのための学校・学級づくり、授業づくりの二つの視点で調査研究を行った。

学校・学級づくりについては、小・中・特別支援学校を参観して、「誰もが共に生き生きと学ぶ」ための工夫や課題を調査している。収集した情報を整理して、課題に対応した工夫を集約し、リーフレットにまとめて、令和8年度以降に全県に公開する予定である。授業づくりについては、「誰もが共に生き生きと学ぶ」ために重要となる視点を、子供たちの「共通の目的」と、それを叶える「学習環境」と捉え、そのための手立てを単元構成と環境構成と考え、実践・研究した。

キーワード 【共生社会の実現 インクルーシブ教育 多様な子供 共に学ぶ 単元構成 環境構成
小学校 中学校 通常の学級 特別支援学級 特別支援学校】

群馬県総合教育センター

分類記号：I01-01 令和7年度 288集

I 調査研究に係る主題設定の理由

共生社会の実現は、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題であるとされている。国¹は共生社会について、「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会」「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」としている。特別支援研究係では、このような社会像を「誰もが共に生き生きと暮らす社会」と捉えている。

群馬県教育ビジョンには、共生社会の実現に関わる目指す学習者像、育成すべき資質・能力、政策が多く示されており、共生社会の実現につながる教育を推進している。当係では、共生社会における社会参加・貢献を、学校での学習や活動への参加・貢献に置き換えて、共生社会の中の学校像を、「誰もが共に生き生きと学ぶ学校」と捉えている。

国や県の動向を受けて、当係では昨年度からインクルーシブ教育に関する調査研究を行っている。今年度は「誰もが共に生き生きと学ぶことができる学校を目指して」を研究主題として、調査研究を行うこととした。

II 調査研究のねらい（3年計画の2年目）

1 長期目標

障害の有無に関わらず、全ての子供たちが共に学び、かつ自らの学びを実現できるようにするための学習集団の形成や、児童生徒の様々な特性に対応した支援の在り方や授業づくりなどについて調査研究し、改善案を提案する。

2 2年目のねらい

「誰もが共に生き生きと学ぶことができる学校」を目指し、学校・学級づくりと、授業づくりの視点で調査研究を行う。学級・学校づくりに関しては、小・中・特別支援学校におけるインクルーシブ教育の推進に関わる現状の工夫や課題を分析するために、学校を参観し、調査研究する。令和8年度以降に、インクルーシブ教育の推進に関わる工夫やアイデアをリーフレットにまとめて公開する予定である。

授業づくりに関しては、「誰もが共に生き生きと学ぶことができる授業づくり」をテーマに、小学校と特別支援学校小学部で実践研究を行い、授業づくりに活用できるツールを提案する。

III 学校・学級づくりに関する調査研究

昨年度の学校・学級づくりに関する研究では、県内の小・中学校の教職員を対象に実施したインクルーシブ教育に関する意識調査アンケートを実施した。その結果から見えた、校種や立場、さらに個人によるインクルーシブ教育への意識や理解の違いを踏まえ、まずは全ての教師が学習面・行動面で困難さのある子供を見取る力、支援する力を高めることが必要と考えた。教師が自ら子供の実態把握や分析をして、必要な支援を考えるためのツール『シフトアップシート』を開発し、小学校で実践研究をした。研究の成果として、教師の子供の見取りが深まり適切な支援が考えられるようになった、子供と向き合う際の意識が変わったなど

¹ 中央教育審議会（2012）「特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告1『1. 共生社会の形成に向けて』」

の変容があった。また、子供には困難さの改善につながる行動の変容が見られた。気になる行動がある子供への個別の支援の充実につながる研究として成果を得ることができた。しかし、学級の中には、気になる行動として表出しないが、学びづらさや居づらさを感じている子供がたくさんいることが推測される。これらを踏まえ、全ての子供を対象とした「誰もが共に生き生きと学ぶことができる学級づくり」を考えて情報発信していく必要があると考えた。

そのためには、まず小・中・特別支援学校におけるインクルーシブ教育の推進に関わる現状の工夫や課題を、実際に見て知る必要があると考えた。そこで、今年度の学校・学級づくりに関する調査研究では、学校に伺って、学習環境、学級経営の様子等を参観したり、教員から工夫していることや課題に感じていること等を聞き取ったりして調査することとした。併せて、授業づくりの工夫や課題についても調査することとした。令和8年3月現在で、小学校7校、特別支援学校5校を調査している。調査したことを集約し、インクルーシブ教育の推進に関わる工夫やアイデアをリーフレットにまとめて、令和8年度以降に公開する予定である。

IV 授業づくりに関する調査研究

1 昨年度の研究との関わり

昨年度の授業づくりに関する研究では、特別支援学級の子供が交流及び共同学習で参加する通常の学級の授業において、誰もが共に生き生きと学ぶことができるよう、一単位時間の授業パッケージ『学びーイング』（資料1）を考案し、実践・研究した。『学びーイング』は資料1に示した手立てで構成されている。誰もが生き生きと学ぶための要素を、学習への目的意識、見通し、それを叶える学習環境、学びの価値付け、認め合いと仮定して、五つの手立てを設定した。この『学びーイング』を用いて、中学校の家庭分野で、特別支援学級の子供も参加して実践した。その結果、誰もが学習への目的意識が高まった、誰もが学習形態や用具、探究・表現方法を選択しながら自ら追究できた等の成果があった。当係としては、この実践を通して見られた子供の姿を、誰もが共に生き生きと学んでいる姿の一つとして捉えた。このような授業づくりを県内の全ての学校、全ての授業に広げていくためには、「どの学校・学年・学級でも、すなわちどの学びの場でもできる、どの教科でもできる、誰でも実践できる」といった視点で発展させる必要があると考えた。

実際、学校には学びの場や共に学ぶ相手による学び方の違いにより、授業への見通しがもてず、戸惑い、生き生きと学べていない子供が多くいることが推測される。交流及び共同学習で共に学ぶ際の特別支援学級や特別支援学校の子供はもちろんのこと、通常の学級にいる困難さのある子供、場合によってはその他の子供も戸惑う場面があるだろう。また、教師の側も、多様な実態の子供たちに対して、どのように指導・支援すればよいのか、悩むことも多いだろう。

どの学びの場でも、どの教科でも、誰でも実践できる、誰もが共に生き生きと学ぶことができる、そのような授業づくりがあれば、子供たちは安心して共に生き生きと学び、教師も安心して指導・支援することができるのではないかと。違う学びの場にいる子供たちが共に学べる機会を増やし、学べる範囲を広げ、やがては通常の学級の子供も、特別支援学級の子供も、特別支援学校の子供も、誰もが共に生き生きと学ぶことができるようにしたい。そのような思いをもって今年度の授業づくりの研究に取り組み始めた。

2 研究の仮説

昨年度に開発した一単位時間の授業パッケージ「学びーイング」の手立ての中で、特に有効と考えたの

は、手立て1「児童生徒の心をざわつかせる導入」と手立て3「多様な学び方や学習環境の提供」である。手立て1を講じることで、単元の学習に対して子供の「やりたい」「知りたい」という目的意識を引き出すことができ、同じ目的でつながった子供が自然と共に学んでいる姿が見られたからである。また、手立て3を講じることで、子供たちが自ら学びを進め、その中で自然と協力し合ったり、互いの学びを尊重し、認め合ったりする姿が見られたからである。今年度の研究では、「学びーイング」のような授業づくりを、よりシンプルな手立てで実現するために、授業づくりの視点を学習に取り組む共通の目的意識と、それぞれの子供に合った学び方の二つに絞ることとした。そして、以下の仮説を立てた。

～研究の仮説～

「やりたい」「知りたい」という共通の目的でつながった子供たちが、目的意識をもち続けながら、自分に合った学び方で自ら学びを進めることで、同じ学びの場で協力し合い、認め合いながら、誰もが共に生き生きと学ぶことができるのではないか。

交流及び共同学習も含めると、共に学ぶ子供たちの実態は実に様々であり、同じ目標で学んだり、同じ活動に同じように取り組んだりすることはできないこともあるが、「やりたい」「知りたい」という気持ちは共有できるのではないか。共通の目的でつながった子供たちは、その目的に向かって自然と共に学ぼうとするのではないか。また、目的意識をもち続けながら、自分に合った学び方で自ら学びを進めることで、誰もが積極的に参加・貢献し、協力し合い、それぞれの成果やがんばりを認め合いながら、共に生き生きと学ぶことができるのではないか。このような考えから上記の研究の仮説を立てた。

3 研究の手立て

研究の仮説を立証するために、前述の学習に取り組む共通の目的意識と、それぞれの子供に合った学び方の二つの視点で以下の手立てを考えた。

～研究の手立て～

- 1 共通の目的でつながり、目的意識をもち続けながら学ぶことができる単元構成
- 2 自分に合った学び方で自ら学びを進めることができる環境構成

4 実践①について

研究の手立てを講じて、長期研修員2名がそれぞれの研究協力校〔小学校、特別支援学校小学部（以下、協力校）〕において実践①を行った。なお、実践①は、手立ての効果を検証するために、単元や環境の構成

～実践①の成果～

○導入で子供たちが「やりたい」という目的を強くもち、その後の学習への意欲が高まった姿が見られた。

【小学校の例】

試しの活動では夢中になってロケットを飛ばし、誰もが合同な羽をつくれるようになりたいという気持ちをもった。

【特別支援学校の例】

普段は受身になることが多い子供が、ロボットを作りたくて自ら教材に手を伸ばした。

○子供たちが目的を達成できたときに、達成感や充実感を得ている姿が見られた。

【小学校の例】

自分たちが作ったロケットを夢中になって飛ばし、歓声を上げながら喜びを分かち合っていた。

【特別支援学校の例】

ロボット完成の瞬間をじっと見守り、完成後は嬉しそうに動かしたり、一緒に写真を撮ったりしていた。

○子供たちが自分に合った学習形態を選んで学ぶ姿が見られた。

【小学校の例】

- ・自分だけの考え、より多くの考えを見付けたくて一人でじっくり取り組んでいた。
- ・考えたこと、気付いたことを仲間と伝え合いながら取り組んでいた。

【特別支援学校の例】

- ・自分のペースでじっくり取り組んでいた。
- ・仲間の活動の様子を見て、まねしたり、協力して作ったりしていた。

～実践①の課題～

- 単元構成、教材づくりに多くの時間と労力を要した。
- 目的と学習内容をうまく関連付けられなかった時間があった。
- 環境構成・当日の環境づくりに多くの時間と労力を要した。
- 子供の実態に合った学び方を準備できなかった時間があった。

以上のことから、二つの研究の手立ての効果が確認できたと共に、単元を通しての効果や持続可能な手立てであるかといった点で課題があることが明らかになった。

「どの学校・学年・学級でも、すなわちどの学びの場でもできる、どの教科でもできる、誰でも実践できる」「誰もが共に生き生きと学ぶことができる」といった視点から二つの手立てを改めて捉え直し、手立てを単元を通して効果的であり、持続可能なものとするために、手立て1においては、目的と単位時間の学習内容をうまく関連付けた単元構成のアイデアを手軽に得られるよう、単元構成ツール『ヤルキミチコ』（資料2）を開発し活用することにした。

また、手立て2においては、誰もが自ら学びを進めることができる環境構成のヒントを手軽に得られるよう、環境構成ツール『トトノエタロー』（資料3）を開発し活用することにした。

5 単元構成ツール『ヤルキミチコ』、環境構成ツール『トトノエタロー』について（資料4）

単元構成ツール『ヤルキミチコ』を活用した単元構成の考え方、環境構成ツール『トトノエタロー』を活用した環境構成の考え方については、資料4を参照してほしい。

6 実践②について

単元構成ツール『ヤルキミチコ』、環境構成ツール『トトノエタロー』を活用して、長期研修員2名がそれぞれの協力校（小学校、特別支援学校小学部）において実践②を行った。実践の詳細は、長期研修員の報告書を参照してほしい。実践②を通して、以下のような成果があった。

～実践②の成果～

<子供について>

○誰もが単元を通して、目的意識を持続して学習に取り組む姿が見られた。

【小学校の例】

2年生に分かりやすく伝えることを意識し続けながら、ことわざ調べやスクープづくり（動画など）に取り組んでいた。

【特別支援学校の例】

招待する友達を思い浮かべながら、クイズづくりや招待状づくりに取り組んでいた。

○誰もが自分に合った学び方で、自ら学びを進める姿が見られた。

【小学校の例】

特別支援学級の児童も『動物ランド』のコースを選択しながら、自らいろいろな跳び方に取り組んでいた。

【特別支援学校の例】

測る道具を選択しながら、自らコロッチャの記録の計測に取り組んでいた。

<教師について>

○二つのツールを活用することで、単元や環境を短時間で構成でき、教材づくりや当日の環境づくりも要点を押さえてできた。

【小学校の例】

『動物ランド』の活動に合った適切な環境構成を、学校にあるものでできた。

【特別支援学校の例】

カスタムAIアシスタントからの提案を活用したことで、教員間の話し合いが効率的にできた。

○経験の浅い教師も二つのツールを活用することで実践することができ、手立ての効果を実感することができた。

【特別支援学校の例】

2年目の教師が、ツールを活用した単元構成・環境構成の効果を実感し、「今後の授業づくりにも取り入れていきたい」という感想をもった。

以上のことから、『ヤルキミチコ』と『トトノエタロー』を活用して二つの研究の手立てを講じることで、「やりたい」「知りたい」という共通の目的でつながった子供たちが、目的意識をもち続けながら、自分に合った学び方で自ら学びを進めることにつながったと考えた。また、活動の中で、互いが取り組んでいることを「いいね」と認めたり、手伝ったりする姿を引き出すこともできた。

7 授業づくりに関する調査研究のまとめ

今年度の授業づくりの研究の成果から、共通の目的でつながり、目的意識をもち続けながら学ぶことができるよう単元を構成したり、自分に合った学び方で自ら学びを進めることができるよう学習環境を構成したりすることが、誰もが共に生き生きと学ぶことにつながると考える。共生社会の実現につながる授業づくりの一つと言えるのではないだろうか。今年度研究した授業づくりや、開発したツール『ヤルキミチコ』『トトノエタロー』が、県内の先生方の授業づくりの一助となるよう、研修や当センターWeb ページ、研修支援隊等で幅広く紹介していく予定である。